

# ボランティアの社会的意味論—現代の菩薩行の功罪—

近藤良樹

## 1. 人間愛

ボランティアは、余裕のある人が自発的に無報酬で勤労奉仕しようというものだが、余裕があれば、ただちにボランティアに向かうわけではない。いくらゆとりがあっても、エゴイストは、ひとのために役立つとは思わない。人間の欲望には際限がなく、余裕ができたとしても、自分のことだけを考えるような者は、自分のためにしかこれを使おうとは思わない。

ボランティアし、他者のために尽くそうという姿勢は、エゴイストであることを停止して、かまえを180度転換したものである。社会に寄生するのみの態度をあらため、共生を願い、社会のためにと愛他の気持ちを持ち、利他主義的なかまえをもつことが出てきてはじめて可能となる。ボランティアにおいては、利他主義(altruism)・人間愛(philanthropy)がいわれ、慈悲心・菩薩の心がいわれる。

ボランティアは、しばしば、救済・手助けを求めている人々への無給の勤労奉仕になるが、そこにある愛は、同じ人間に対しての慈しみである。あまりにもひどい格差に、その格差を埋めようとし、理想的には自分たちと同一となることを望んで自らの労働を贈与していく。エゴイストはもちろん、そうではないひとでも、ときには、貧困などを前にして、それは各人の責任であり弱肉強食の世の中なのだから、慈悲だ慈善だなどと甘いことを言ってもはじまらないと冷たい反応を示すことがある。ボランティアしようというようなひとは、こういう格差を目の前にして、貧困を宿命・自己責任・必然とつきはなすのではなく、同じ人間であるものが非人間的な生存しかできていない事実で悲しみのところをいだき、自分たちのみが恵まれていることにいたたまれず、手助けできるところに手をさしだし、さらにそこから抜け出せる可能性に目を向けて、同じ人として同じレベルに立ちたいと、その行動にでていくのである。人は、人として平等であるべきで、同じように肯定され尊ばれるべきことを身をもって示していくのであり、同じ人間であることへの愛、人間愛に生きようというのである。

ボランティアは、めぐまれない人々を前提にしてなりたつことがしばしばで、ここには、よい意味での「同情」がある。同情は、同情する者が上位にあつて、される者が下位にあるという位置関係をとることがあつて、ときに同情される方からは、見くだされて人としての尊厳を傷つけられ不愉快なものとなることがある。ボランティアでも、そのことはときにはあろう。だが、ボランティアする者の同情は、単に寄付や献金する場合とちがって、その存在そのものを恵まれない同情される者自身のところまで降ろしているので、同じ存在になって同じ苦悩の感情をいさぐという、よい意味での文字どおりの「同情」になることができ、優越感を背景にもった不愉快な同情にはなりにくいといえることができる(尊大なボランティアは、これを受けるひとびとから拒否され、早々に退散させられることになる)。わが子が泣いていても「同情」はしない。他人が困っているときに同情するのである。ボランティアも、わが家ではしない。自立した他人との間に成立するものである。この自立した他者の、救済を求める切ないところをしっかりと受

けとめるのが、人間愛からする「同情」になる。

## 2. 現代版の「滅私奉公」

現代の我が国のボランティアは、単に恵まれない人や災害の罹災者に献身しようというだけのものではなく、広範なものになっていて、地域社会・公的な世界において日常的に無報酬で役立ちたいと、公的な機関の手がまわりきらないようなところにその手助けをしていくものともなっている。自分のためではなく、地域とか国とか、あるいは世界そのもののために、全体のために奉仕しようと、広く利他的に活動していくものとなっている。

これに対しては、全体とか公的なものに関しては、国とか自治体というような公的機関が責任をもって対処していくべきで、私的なボランティアなどが出ることはない、そういうことをやると、公的機関の怠慢を増長させることにもなりかねず、抜本的な解決を遅らせるだけだと批判されることもある。

だが、国や自治体は万能ではなく、予算も限りのあることで、国民は、自分たちでやれることは、公的機関を待つまでもなく、自分たちではじめていくべきではないかと、自発的に地域社会に勤労奉仕していくのがボランティアするものの精神である。どちらかという、全体が始元にあるのではなく、個が確固としてあるのだという立場であろう。極端には、全体は、個の集合であるのみで、それとして別にあるものではないと考える立場であり、そういう立場からは、できるだけのことは、自分たちのボランティアでしなくてはならないということになる。アメリカは、ボランティアの盛んな国だが、かつてのアメリカ西部開拓のように、ばらばらの個人と家族のみがあって、ほかには何も無いところからはじめる場合、身近には存在しない全体や共同体になど依存のしようがない。あるのは自立した個人のみということであれば、各人がまずは、緊急の必要に応じて自発的に、自らの武器等をもって集まり一時的な自警組織をつくったり、消防でかけつけることになる。個人の自発性をもって、自らの生活する地域にとって必要と思われる全体・組織をつくり、このなかに各人が参加していくわけである。いまでも、アメリカのボランティアという、地域の自分のコミュニティーに対してのものが中心である。

自分たちのボランティアの力で、地域社会がなりたち、国がなりたっていくとすれば、ボランティアの意義は大きい。本来的に社会的存在としての人間は、そういう社会的な役立ちが目に見えれば、一体感情・連帯感情をもって社会的に充実感をいだけ、自らのかけがえのない存在価値を見出し、社会的な生きがいを感じるができるものである。

これは、個としてのエゴのためではないが、それをすこし拡大した、「自分」のうち、「自分」の町、「自分」の国に対しての奉仕としては、エゴが拡大されているのみではないかということもできる。だが、ボランティアは、その利他主義の「他」は、端的な他者にまで広がったものであって、「自分たち」のもとにとどまるものではない。商品の等価交換は、敵対的な関係のもとでも可能だが、ボランティアが無報酬であるとは、本来的には等価交換される端的な他者の間で、つまり労働にはそれに見合う報酬があるあいだがりにおいて、これを一方的に贈与するということである。あかの他人に対して、「赤十字」がそうであるように、場合によると敵対的な関係に

あるものにすらも、広く奉仕する態度をもつのである。

ひとは、「うち」をもつ。自分のうちをはじめとして、自分の国までがあり、これは、もうひとつの、あるいは拡大された自己として、ときにはエゴイストも献身的になることができる。このとき、ボランティアのいう利他主義は、そのような自分・エゴ・うちではなく、他者、他の国のことを思い、敵対する者・敵国にも、必要ならこれに尽くそうというのである。ボランティアは、「うち」のものではなく、そとの他者に、あかの他人に対して奉仕しようというのであり、その利他主義の精神は、この地上の全人類にひろがったものになる。ボランティアは、コスモポリタンである。アメリカのコミュニティーでのように、自分たちの地域社会のためにと始まるボランティアは、おそらく我が国の「勤労奉仕」と同じく、自分の村・自分の町という地域性をもったものになるのであろうが、ボランティアが人間愛・利他主義の精神にもとづくものである限りは、自分の地域社会にしばられたり、これを広がり限界とするものではないであろう。

ところで、ボランティアは、余裕の時間のほんの一時的なものだから、ふつうにはその全存在を利他・愛他にとふりむけて自己犠牲を徹底するようなものではないが、寄付行為などに比しては、より自覚的な利他的な人間愛の行為になる。寄付・献金の場合なら、余裕のお金の贈与は、もともと自分のものかどうかというところもあるし、自分の行為・存在には、ふれないままである。酒を飲んで繁華街を上機嫌でふらつきながら、「お願いしまーす」という声に、ふと献金しようという気になって、さいふをはたくというような軽いものでありうる。だが、ボランティアは、そういう気まぐれなものではありえない。酔いをちゃんとさまして、その生身を労働する現場にもっていき、おのれの労働そのものを贈与するのである。

自己そのものをささげるといって少々おおげさだが、そういうことである。ふつうには、一時的に余暇をそれにさく程度のものであり、だからこそ、一般化するのだろうが、それでも、自己の存在そのものを、いつか、それに注ぐのであり、それそうとうの自覚がなくてはできないことである。自発的に参加するものとして、しっかりとその意義を承知し、自らの行為とその結果の責任をとるものでなくてはならない。

ただし、受け手の方からいうと、客観的な経済的な価値の点からは、ボランティアという勤労よりは、寄付の方がありがたいという場合がないわけではない。アフリカの旱魃地帯への援助を考えるとしたら、日本から若者が大勢でかけていっても、農業技術者などをのぞくと、おそらく、あまり有効な仕事はできない。それよりは、かれらが日本で半月働いたお金を現地に送って援助する方がよほど大きな力になる。あるいは、高い率の失業者をかかえるようなところへの援助にしても、そういうことがいえる。ボランティアは、失業者をふやすことになるが、お金での援助ならば、失業も減らせて一石二鳥となる。

とはいえ、贈与するものの姿勢そのものからいうと、やはり、ボランティアは、最高の慈善の一行為であることにはかわりない。経済的効果からは、寄付・献金の方がよい場合でも、ボランティアは、その存在そのものを受け手のところまで運んで、その苦難の状態に付き合おうというのであり、その心意気は、その人間愛は、何ものにもかえがたい価値をもつことであろう。

### 3. 菩薩行

仏教では、ひとを救うために、自分をなげだし、ひとが救われない限り、自分ひとりが悟って仏になるようなことはしないとの願をかけることがある。菩薩は、そういう愛他・利他に徹底した姿勢をもつ存在といわれる。ボランティアは、その姿勢において、この菩薩と等しいものがあるといえる。キリスト教の場合、もっと徹底して組織的に人間愛(隣人愛)にもとづいて病気の人を救済し貧困の人を援助する活動をしてきた。

では、どうして、宗教は、菩薩行をし、ボランティアしようとするのであろうか。他者へのほどこし、布施・喜捨・敵への愛といったものが根本義になっているわけだが、なぜ、そういうことが多くの宗教の根本義となるのであろうか。おそらく、それは、宗教的に求められる境地としての自己の安心安楽がエゴの滅却によって可能になるということがかかわる。ひとの苦の根源は「身のひいき」「己を思う一念」にあるといわれる。「苦しむ自己」は、「自己」がなくなれば、成立しなくなる。「自分」「うち」のためにというエゴイストであることが苦悩をつくりだす。したがって、苦からの解放は、宗教の求める安楽の境地は、エゴをすてるならば、いともたやすく達成できるのである(困難はこの「すてる」ことにある)。ボランティアは、自分の勤労を他者に贈与し、自己の存在そのものを他者の手段にするものとして、その限りにおいて自分のエゴを滅却しており、愛他の精神をもって行為するということで、宗教的な行に通じるものとなっているのであろう。

ボランティアは、その主要目的は、他者の援助・救済である。エゴの滅却や宗教的な安らぎの境地をめざしたものではない。だが、この他者の救済という目的そのものにも、実は、宗教の方から積極的意味が見いだされるように見受けられる。ボランティアは、自己を滅却しているといったが、あるいは逆のこともいえるのかもしれない。つまり、自己・自我を拡張、拡大していくということである。その愛他の行為において、愛され贈与される他者たちは、もう一人の自分となり、同朋ととらえられていくのである。愛は、その愛されるものと一体になろうとする運動になり、相手をもう一人の自分とし、その全体を「うち」とする。

仏教では、理想の境地として「無我」とともに、「大我」ということをいう。自分がボランティアし贈与しようという世界は、この自我が大きく開花していった、もうひとつの、むしろ真実の自我に、大我になる世界であらう。ボランティアが利他主義において他者に献身しようとするとき、他者は敵どころかもう一人の自分となり自他一体が見い出されることになるのであり、自我は、この他者的世界そのものへと拡大しつつ変様していき、大我的なものをそのとき実現しているのではないか。ボランティアの利他の他者は、無限のかなたへとひろがるコスモスのもとにあった。そういう際限のない大きな自我へとこの小さな自我は、一時的な行為のボランティアにおいてではあるが、拡大することが可能となっているのではないか。他者とひとつになったこの大我は、おそらくは、小我からいうと、小我の滅却された、無我・没我そのものでもあろう。

つまりは、ボランティアは、小我というエゴを、滅私の利他行で滅却するのであり、大我という大きな自己を実現していくのである。ボランティアがこういう姿勢・心構えを強くするに依じて、宗教的な安楽の境地に似たものとなっていくのであろう。

#### 4. 余暇にするささやかな補修

ボランティアは、ふつう余暇の余裕になされる一時的なものである。自分の本来の生活は、べつのところであって、べつのところに入があるから、ボランティアでは無給でやっていけるのである。ということは、ボランティアするものにおいては、本来的な自分は、べつのところにあるということである。自分のその生活は、しっかりとべつの本業において維持していて、その余裕において、恵まれない人のところへ出掛けているにすぎない。だが、仏教のいう菩薩行は、そういう甘いものではない。わが身体(命)を含めすべてを他の者にささげようという姿勢をもった、徹底的に愛他・利他の精神を貫く存在であろう。その点からは、ふつうのボランティア行は、甘いのである。だが、であるからこそ、多くの一般の市民・凡夫が参加できるのもある。真の菩薩行は、仏教者においても、理想・理念であって、現実にもられるそれは、それには程遠いものになる。そのことは、ボランティアに限ったことではない。ボランティアは、凡人・凡夫にもできる菩薩行である。

エゴの生活そのものは、さしあたりは、そのままであり、資本制的存在のままであるから、週日には、ときには詐欺まがいの仕事をやりながら、休日になると菩薩行としてのボランティアに精を出すというようなことになるのかもしれない。休日にのみ、同僚のエゴイストがゴルフに時間つぶしをしているとき、別行動をとって、ボランティアは、恵まれない人とつきあう姿勢をもつのである。それはそれで、まずはよしとしなくてはならないのであろう。この菩薩行は、その姿勢が持続されていくなれば、しだいに、生活をささえている本業の方もまきこんで、次第にこれを浄化していく可能性をもつ。

さらに、自分の一応は恵まれた生活をそれとして保護しつづけていくことは、そこへと恵まれないものを高めようとする事になり、ボランティアの受け手を自分と同じエゴをもった存在として承認してかかわるから、大切なことになるのかもしれない。自己をなげだし赤貧に甘んじながら禁欲的に厳しい生活をしているものは、ボランティアして贈与しようとするとき、おそらくは、受け手にも、そのような生活を求める可能性がでてくる。はては、「ぜいたくな奴らだ」とボランティアをやめてしまうかもしれない。とすれば、恵まれた生活を維持しているものの方が「ぜいたく」なボランティアを維持しやすく、ボランティアしてもらう方も、気兼ねなくこれをしてもらえることもありそうである。

ところで、ボランティアは、地域や困っている人のために尽力し奉仕していこうという自発的な姿勢をもった存在であるが、こういう姿勢をもって活動する人々に、ボランティアとは対立する考えをもっているものがあつた。革命家である。革命への参加は、身を挺してのもので、しばしば無報酬で生命までをかける気概をもっていたが、これは、我が国ではボランティアとはいわない。足元のささやかな改良をもってはじめようというボランティアと、国家などの全体の変革を第一とする革命家は、後者が健在だったころの我が国では、肌があわないように見えた。革命家は、ボランティアを批判して、国家全体を改革して、根本的なところから建てなおして貧者等の救済をはからねばならないのに、ボランティアは、貧困を生み出す元凶としての資本主義体制

をそのままにしておいて、この体制のほころびのみをとりつくろおうという、保守主義、体制擁護派でしかないといわれていたことがある(昨今は、革命派がなくなり、あるいはボランティア化してきて、ボランティアが、一部では政治的となりつつある)。

ボランティア派からいうと、いつになるかわからない夢の理想国家をまっていたのでは、いまの困窮者は、すこしも救われなし、ときには餓死をまつのみとなりかねないのである。革命派は、「それこそは現支配者の非人道性を示すもので、責任は国家権力にある」というが、いま困っている困窮者を救済しようというのなら、いま救済することにちからを注ぐべきではないかとボランティア派は考える。それに理想国家というものがどれだけ理想的なことを実現できるものかあてにならないのであって、そんな幻想につきあってなどおれない、ここで今ただちに現実的な救済の手立てを尽くしていくべきではないかということになる(革命派も、「援農」の勤労奉仕をしたり、貧困地域での「セツルメント」でボランティア的な活動をすることはあった)。

ひとは、個人として自立した確固とした存在であって、その集合体としての国家の役割は、それにできることは限られていて、中世のひとびとが神に期待したような万能のちからを国家にいただくのは幻想でしかないともいえる。各人にできることは各人がはじめていく必要があるという、個別主義・非全体主義の立場をとるものは、個別的なところからはじめていくボランティア的な道をとることになる。国家などの全体にすべての解決策を見い出していくような全体主義は、個別・個人をないがしろにし、これを抑圧・強制する非人間的なものに随す危険性があるとボランティア派・民主派は考える。

もちろん、ボランティア派も、国家などの全体がしっかりとして福祉政策を充実していくことを求めることであろう。なにも全体を無視したり、これの役割を軽視するものではない。ただ、それにすべてを負わせるのではなく、全体にはなかなかできないことで、各人において可能なことは、各人においてははじめようというものである。

ボランティアは、あてにならない革命をまつのではなく、確かな一歩を求めるのであるが、その救済の確実さということでは、寄付などと比べてもすぐれたものになっているのである。直接に受け手に働きかけるものとして、贈与は確実である。寄付・献金は、ときに、「どこに行ったのやら」と、集められたお金が行方不明になることもあるが、ボランティアは、その点、これを贈与するもの自身が直接に出向かなくてはならないから、確かさがある。

ところで、家族内での、「うち」での無償の献身、これを「そと」でも、ということが、宗教にあり、ボランティアにあり、共産主義にある。共産主義は、「うち」に一般的な原理(私的所有の廃棄・全体への無私の献身・無償の贈与・無条件的な生活保障)を外にまで広げてこれを全体化しようとした。宗教もしばしばそうしようとする。だが、その試みは前者のばあい、近代社会においては、ことごとく失敗し、宗教のばあい、持続できたとしても、ごく狭い疑似家族的な信仰者のなかでのことにとどまっている。これに対して、ボランティアは、そとはそととして資本制を保持しながら、資本制的な関係ではうまく対応できないところに限って、無償の献身を行なう。福祉とか公共的な諸問題について、公的機関の手のとどかないところを中心にして、これをボランティアでやろうというのである。ボランティアは、そとの社会で、火急の手助けの必要な

ひとびとに目を向けて、本来的にはうちに注がれている愛を、このそとのあかの他人に対してそぐ。共産主義や一部の宗教の試みとちがって、これのみが現代社会では生き延び拡大していくものとなっている。

## 5. ボランティアの資本制への対立と補完

ボランティアは、自立した個人とその集団を前提にし、自分たちのそとの無縁な、あかの他人との間になされる勤労の贈与である。それは、資本制の基礎としての商品関係、つまり、無縁の疎遠な人々が商品を等価交換し、自己の所有する労働力を賃金と交換する関係と同じ、近代的な個人のあいだでの社会関係に立っているのだといえる。その本来的には、等価交換されるべき間柄であり、自分の労働には賃金が支払われる関係になるところにおいて、それを前提におきつつ、ボランティアは、これを無料とし、贈与するのである。資本制をふまえながらも、これをささえる等価交換・私的所有のエゴイズムとは、その活動形態においては、まるで反対となる。等価交換原理を無視して、利他的に自己の労働力を贈与するのである。無料でサービスするのである。商売は、そこではなりたたない。利益を生み出すマネーゲームが資本制の大原則だろうが、利益をうむどころか、等価交換すらもしないで、いうなら商品を無料でくばるのであって、その形式は、資本制の原理的な運動に対立する。資本家は、同じ生産品に関しては、とうてい太刀打ちできず、そのボランティアを目のかたきにするのであろう。

資本制の労働は、賃金の支払いを大前提にする。有給であるから、働くのである。だが、ボランティアは、本来的に「無給」で、「無給ボランティア unpaid volunteer」がボランティアである。「有給ボランティア paid volunteer」は、本来的には、矛盾概念である。かりにボランティアが当の社会に全般化したとすると、有給の労働者は、無給のボランティアにとってかわられ、大量の失業者をボランティアは生み出し、賃金労働者を駆逐することになる。

ボランティアは、しかしながら資本制をつぶそうという運動ではない。資本制的私的所有を拒否して、ボランティア的勤労の贈与によって理想社会をつくろうというような運動はある。共産主義は、「能力に応じて働き、必要に応じて受け取る」という社会をめざすのであれば、その労働に応じてという等価交換の社会ではない。自分にできる自由な労働を全体にささげる社会である。その理想は、等価交換の打算的な商品社会を廃棄したボランティア的贈与の精神の生きる社会であろう。それは、夢のまた夢でしかないが、現にこれをこころみているものが宗教的集団には存在する。いな、社会の基本単位をなす小集団としての「家族」「うち」では、それは、むかしから実行されてきたことであつた。親は、うちのために、全ての勤労とその成果を贈与しつづけているのである(家庭での報われない家事労働を「シャドウ ワーク」ということがあるが、給料を入れることも同じで、評価されることのあまりない「シャドウ ドウネーション」(陰の献金)である)。むくわれることの少ないこの「ボランティア」的強制労働に精魂つかいはたしているのが我が国の家庭(親)の一般的なすがたである。

だが、そういう全般化したボランティア的贈与は、もはや、ボランティアとはいわない。うち

のためにいくら贈与しても、それは、ボランティアや寄付・献金の範疇には入れられない。ボランティアは、あくまでも、そとの、あかの他人に対してなされるものである。かつ、共産主義的に全般化しているのではだめで、生活のかては、べつのところから確保していて、そのほんの余暇に一時的になされるものにとどめられるのが原則である。つまり、資本制の等価交換なり、有給の勤労というものに生活の基礎はしっかりもっていて、これを大前提にして、そのあとに生じる私的な余裕・余暇にのみ、この資本制的な営みをはなれて、(うちでは原則である)贈与的な行為にしようというのがボランティアである。資本制そのものを侵すようなところにまでボランティア的贈与の運動はふみこまないのであって、そこまでふみこんだものは、特殊な閉鎖的な「うち」的宗教集団とか、共産主義になるのであって、もはや、それは一般的な意味でのボランティアであることをやめることになる。「過ぎたるは、及ばざるがごとし」である。

生活のささえ・糧をマネーゲームの資本制によってえているのがボランティアであれば、ボランティアは、貧困階層や貧困な国々を収奪する富裕な階級・国家に属する者の一活動になる場合もあるわけである。エゴイズムの原理にしたがって、資本には「倫理」など無用とばかりに、私的所有の拡大にいそむ日々をおくりながら、その生活の余暇に、これとはまったく別の愛他・利他の原理にもとづく運動としてのボランティアに参加するということである。ボランティアは、極論すれば、ときには、つみほろぼしであり、非人間的な日常からのひとときの解放になるのもあろう。

ボランティアは、資本制的な商売のそとにある慈善、勤労の贈与・無給の勤労奉仕であるが、資本制そのものを否定するものではない。ボランティアする者は資本制において恵まれている存在で、余裕があり、だから贈与も可能となっているのである。資本主義体制そのものについては、これを打倒しなくてはならないなどとは考えないのがふつうである。これまでのボランティアは、そうだった。それが体制そのものを根源的なところから改革していくものではなく革命的ではないという点では、現状の資本制のほころびをつくらうだけであり、資本制の擁護者にとどまると位置付けられることもなってきた。資本主義体制を否定しようとする革命派からは、ボランティアは、反革命的なものにとらえられ、その主観的な慈善は客観的には偽善だ、資本主義的収奪をかげで支えるものだとして批判的に見下されることがあった。

現状のほころびの単なる補修にのみ自分たちの行為を限定したものであったとしたら、たしかにボランティアは、保守的なものにとどまる。矛盾・ほころびの根源を追求し、これを根底からあらためていくことにもかかわっていく必要がある。だが、ボランティアが矛盾の糊塗、生じたほころびの補修としてあるというとならえ方は、おそらく一面的であろう。逆に、「はじめにボランティアありき」といわれることがある。資本制があって、それから生じた否定的な部分の補修をボランティアがするのではなく、反対に、資本制がなお取り組みえない創造的なものに、まずボランティアが先駆的にとりくむのだということである。消防など、緊急のことがらとしてまずはボランティアで行なわれはじめ、専門化していったというわけである。そういうボランティアは、たしかに資本制の「しりぬぐい」ではなかったのである。ただし、それもまた、資本制を批判も否定もするものではなかった。

資本制の「しりぬぐい」になるせよ、これに創造的に先駆したものとなるにせよ、ボランティアが請け負うものは、現在の資本制において、儲けになる仕事として「企業化」することが困難なものになる。その緊急不可欠なものは、たとえば他国の侵略を排撃することとか、身寄りのない老人のお世話とかは、今は国や自治体が背負う仕組みになっているが、そうでないものは、予算も人員も制限されているのだから、どうしても公的機関の手が回り切らないことになる。そこでは、地縁血縁の援助の希薄化していつている現代においては、ボランティアあたりがいちばん期待される存在となってくるのである。

## 6. 勤労尊重の精神

恵まれている階級・階層の者は、労働者・勤労市民を蔑視することがある。恵まれないものへの援助が寄付・献金である場合、贈与者自身の存在は、「下賤な」労働者・農民とは区別して高貴なままであることができる。だが、ボランティアは、そういう姿勢を拒否する。余裕のある者たちが、その存在そのものを「下賤なところ」までおろして、自らが、労働をしようと意欲をもやすのである。当然、労働に対する蔑視はなくなっており、贈与する価値あるものとして自身の労働をささげていくのである。

労働に対する見下し・蔑視は、自分の労働力を「売る」ということ、賃金を獲得するということにひとつはあるが、それ以上に、労働という肉体的な活動そのものへの蔑視がつよくあったものようである。ボランティアでは、「売る」という「下賤な」ことは、「無給」だから当然なのだが、労働という活動そのものを自らが引き受けるのであり、しかも、しばしば単純な肉体労働にかかわることが多く、自分の存在をそれに投入していく価値があるとみなしているのであって、労働への蔑視は払拭されているということができる。その人間愛は、万人を差別なく等しい存在と見なし、そのことを自らの身をもって示しているのだということができよう。

ただし、ボランティアは、常に労働者・勤労者の歓迎するところとなるかということ、そうでもない。その労働尊重の姿勢はよいのだが、場合によると、ボランティア労働は、労働者にとってのとんでもない競争相手となるからである。つまり、労働者の方は、賃金を要求するが、ボランティアは、これをしないのだからである。それは、労働者にはかぎらない。個別的には資本の側にとっても、問題となりうることである。大震災で町の機能が停止したとき、地元の商店が開店するまでは、ボランティアとそれによる救援物資の供給は、必要だが、これらが開店できるようになると、援助はひかえなくては、商店をおびやかす存在になってしまう。いくら大商店が値引きしても、ボランティアの方は、無料なのだから、こちらにお客さんは集まる。商店は、あがりたりとなることまちがいなしである。

ところで、賃金労働者は、その具体的な労働の内容が気に入ったものであることを問題にしないが、主たる関心は、当然、賃金の高さにある。いくら気に入った仕事内容であっても、賃金が極端に低いものは、選ばれない。逆に、人気のない仕事であっても、賃金を上げれば、ひとは、あつまる。これに対してボランティアの場合は、その仕事内容つまり具体的有用労働そのものに主要な関心があり、自分にそれが出来そうで、その意義が大きいと自覚できれば、これ

に参加していくことになる。

賃金は、時間単位ではかられる抽象的な労働の面から出されるのだが、ボランティアは、無給の奉仕であって、賃金は問題外だから、そういう抽象的な労働、つまり人間に可能な活動ならなんでもよい、仕事内容を問わないという労働一般には、あまり関心が向かないことになる。もちろん、ボランティアは、余裕の時間に一時的に参加するものとして、何時間何日間参加するというかたちで、抽象的労働の計測と同じ計測によることに、ふつうにはなる。それが不要のときは、特定の具体的な労働内容の贈与として、その特定の生産物なりサービスの成果そのものによって測られるはずである。「何時間」ではなく、「何の」「どういう」（具体的有用労働）ボランティアへの参加かが問題となるのである。労働への充実感は、なんといっても具体的な有用な労働のもとに成立するものであり、ボランティアは、それをしばしば求めてこれに参加している。自由な労働が人類の永遠の楽しみとなり充実となるのは、そして、その労働をもって社会的参加を果たして充実を感じることができるのは、その有用具体的労働の形態のもとでのことである。ボランティアは、この永遠の具体的労働を求めて、それを贈与するのである。

ボランティアは、無給ということで、資本制の商品の等価交換原理、賃金と労働力の交換から離れているわけだが、その点では資本制的原理のそとに立っていて、これをそとから批判的に見ることが可能な立場にあるのだともいえる。ボランティアは、利他主義であって、資本制における無慈悲なエゴイズムに批判的な眼をもつことが可能なのだが、さらに、その等価交換原理や賃金労働の原理に対しても、距離をとっているのである。これは、何とんでも基本的には資本への批判であるが、場合によっては、労働する側への、いな人間そのものへの批判ともなる。災害復旧で土木業の労働者がいやいや仕事をしているとき、まずは、無報酬のボランティアは不可解で物好きとうつつるだろうが、やがては、自分たちへのいましめともなっていくことであろう。あるいは、どんなボランティアであれ、ボランティアが無報酬で働こうとしているのを見るならば、人間にとっての労働の意味・意義を再確認させられ、人間はホモ・ルーデンス(遊び人)であるよりは、ホモ・ファーベル(仕事人)であるべきことを反省させられるかもしれない。

ものごとの批判は、きびしい真の批判となるには、外的批判となる必要がある。もちろん内的批判も自らに死刑の判決をいいわたす(つまり自決・自殺)ような厳しいものに時にはなるが、ふつうには、自己批判は、甘くなり弁解がましくなってしまう。資本制の批判も、資本制の担い手自身からの批判では、甘くなって、これを根底から廃止すべきだというようなラディカルなものにはならない。そとから、その原理に浸っていない立場から批判するときには、遠慮はいらないから、真の徹底した批判となりうる。ボランティアは、そういう意味では、資本制のラディカルな批判ができるのである。しかし、生活は、資本制をよりどころとして、その恵みをうけ余裕をもらっていて、恵まれていない者にその余裕部分を贈与するということでは、ラディカルさには、少しかげりが出てくることになるかもしれない。

## 7. 自由なボランティアは、強制する資本制にはかなわない

ボランティアは、無私のおもひからする尊い行為である。だが、その広がりには、なかなか社会全体、

全員をまきこむところまではいかない。慈善・善意のものとして、悪人やエゴイストは、それへの参加を当然拒否する。祖国防衛がボランティア的なものに、義勇兵(volunteer)まかせになったら、他人を利用して自己を守ることにたけているエゴイストは、参加しないであろう。犠牲になるのは、善人のみとなる。生き残る悪人のために善人が命をかけるのである。こういう場合、やはり、国家などの全体は、悪人も参加できるように、防衛の義務を課し、強制する必要があるだろう。

商品の等価交換にもとづく資本制は、その点では、ボランティアとちがいで、幅広い参加を実現する。悪人と善人を一切差別することなく、参加させる。ボランティアのばあい、悪人・エゴイストは、その慈善の活動には、参加しない。だが、その贈与のわけまえには、むしろ、他者を押しつけてもこれにあずかろうとすることであろう。ボランティアするものは、そういう悪人には不快感をいだき、できれば差別してやりたいと思うこともでてこよう。資本制は、その点、等価の交換なのだから、相手が悪人であろうと、損したという気にはならなくてよい。物(商品)を介して悪魔とでもつきあえるのが資本制商品社会である。第一、この制度は、ボランティア精神からは決して働かないであろう悪人やエゴイストを一生懸命に労働にかりたてさえする。各人すきなようにという自由社会であるから、生きていくには、悪人も自分で生活の手段を考えねばならない。そのためには、自分のではなく、他人のほしがる商品をいやでもつくらねばならない。あるいは、高賃金をもとめて、みんなのいやがる仕事ですら、エゴイストは引き受けることであろう。ボランティアでは考えられないことである。

社会主義社会は、国民全員がボランティア的な精神にあふれておれば、失敗しなくてもよかつたかもしれない。だが、現実には、働かなくても分け前だけは同じようにもらえるということでは、なまけ者・エゴイスト・悪人を優遇する制度となって、ボランティア精神にあふれてみんなのためにと真剣に働く者はしだいに馬鹿らしくなったのであった。悪人のはいりこまない自分の家庭とか、特殊な宗教的団体のみが、慈愛にみちたボランティア的な贈与のもとにその営みを続けることが可能なのである。

「能力に応じて働き、必要に応じて受け取る」という共産主義的なユートピアは、これまでの「家庭」では、割合うまくいっている(ひとのみか動物の家族一般にさかのぼれる制度である)。しかし、他人同士の寄り合いである社会においては、社会主義の理想に燃え、宗教的な共同社会をという理想にもえて、その組織を共産的、共同消費的な形にした場合、とんでもないものになっていくのが常のようである。みんなが天使であるあいだはよいのだが、悪魔がはいりこむと、小さな宗教集団であっても破廉恥になってしまい、その持続は困難になるように見受けられる。エゴイスト・悪人の少なくない現代人のもとで、社会主義的な国家をつくろうなどということは、夢のまた夢になるのであろう。

これに対して、資本制は、天使であろうと悪魔であろうと参加させ、悪魔すらも一生懸命に働かせる、包容力の大きい制度ではある。というより、この制度は、もともとエゴイストを前提にしてたてられているのである。エゴイストたちが、「自分は決して損なことはしないぞ」と思いつつ、他人の私有物を入手することをみたす形式として、等価交換の商品社会をつくり出している

るのである。等価交換とは、両方とも損をしないで(同じ労働量の交換)、かつ、必要とするものは手に出来て(異なった使用価値の交換・獲得)、両方とも得をすることができるという制度である。ということで、私的所有・等価交換からなる資本制には、どんなエゴイストも参加できるのであり、むしろ、かれらを、その私的所有と欲望充足のために、一途な活動にかりたてて、しばしば、他人のために人一倍役立つという彼等自身の思いもしないことを結果する。本来、人間愛にあふれた、それこそ天使のようなものでないとながくは付き合いきれない病人の世話であっても、「医者は金になる」というだけで、「ずる賢いエゴイスト」と評される若者をして、すすんでこの仕事に従事させ、やがて、天使とまではいかないとしても、聖人と崇められるような存在にまで変身させさせする。

ボランティア的な精神、自発性とか贈与は、人類の進歩や社会の充実ということでも、「強制」や「私的所有」ということに比して、かりたてるところが小さいようである。「どうか高価に売れますように」という商品生産とちがって、「贈与します、ただであげます」では、仕事への厳格さは求めにくくなりそうである。また、自分で自発的にということになると、どうしても、自分を甘えさせてしまう。もちろん、自発性があると、やる気があるわけで、そのひとつの通常力は、最大限発揮されることにはなる。だが、それにとどまる。ひとには、余裕があってもっとだせる能力がそなわっているのであるが、それは、自発性ではひきだしにくいのである。そこから強制され、あるいは、はげまされると、陸上や水泳の大会で競争させられる時がそうであるが、ひとは、一人のときとちがって、その有する能力をかなりのばせる。その社会から「使命」を与えられ使命感にもえるとか、高収入の報奨があたえられるとか、商品開発で競争状態にある等のことがあって、ひとは、一途にがむしゃらに駆り立てられるのである。そういうプラスの強制が、人類社会の全体的な充実や進歩のためには大切になりそうである。